

平成26年度 防衛大学校卒業式  
防衛大臣訓示

本日ここに、内閣総理大臣御臨席のもと、防衛大学校の卒業式が挙行されるにあたりまして、防衛大臣として一言申し上げます。

「卒業生諸君、卒業おめでとう」。先ほど、諸君が、学校長から卒業証書を受け取る姿を拝見しましたけれども、ここ小原台で4年間、学生舎生活、校友会活動、学業において、ひた向きに自分自身と向き合い、全力でその向上に取り組んできたこと。真のリーダーとして素晴らしいことを学び、身に付けたこと。そして、国の安全保障という大事な仕事を担い上げる人物となって、大きな自信を得たことを私は確信いたしました。私もまた、諸君と同じく、35年前にこの防衛大学校を卒業しましたが、本日の皆さんの真摯な姿を見てみると、ここで、学び、心身の錬磨に励み、今も変わらぬかけがえのない友情と信頼の絆を築き上げたことを、昨日のように思い出します。

本日、卒業の日を迎えた本科卒業生諸君は、この後、自衛官に任官し、我が国の平和と安全を守るべく崇高な任務に就くこととなります。誠に、頼もしく、誇らしく思いますが、どうか、国民から寄せられた大きな期待と厚い信頼に応えられる人物として大成されることを祈念いたします。

また、研究科を卒業する諸君は、目まぐるしく変化をする国際安全保障に対応するため、本校で身につけた高度で専門的な知識をそれぞれの持ち場で、十分に発揮されることを期待をいたします。

そして、各国から留学生としてこられた諸君。遠く生まれ育った母国を離れ、馴染みのない日本語や日本の習慣など幾多の困難を乗り越え、本日、ここに立派に卒業の日を迎えられたことに、心から敬意を表します。本校での知識や経験が、母国において存分に活かされることを願い、ここでの友情は真の友情であり、母国と我が国との友好親善関係をより一層深化させるための架け橋となってくれるよう、心から切望いたします。

さて、これまで、諸君の先輩自衛官達は、我が国の平和と独立を守り、国の安全を保つために、直接侵略及び間接侵略に対し、我が国を防衛すること、必要に応じて公共の秩序の維持にあたること、我が国周辺の地域における我が国の平和及び安全に重要な影響を与える事態に対して行う我が国の平和及び安全の確

保に資する活動、国際連合を中心とした国際平和のための取り組みへの寄与、国際協力の推進を通じて国際社会の平和及び安全の維持に資する活動という任務を担い、そして大規模な災害派遣活動はもちろん、PKOや国際緊急援助活動など、様々な国民の要望に対して、その期待に応え、多くの困難な任務を立派に完遂してまいりました。

今も、灼熱の地「南スーダン」では、電気や水道も整備が不十分な環境下において、避難民保護区域における道路整備や敷地造成、検疫支援などの文民保護に資する活動を行っております。また、「ソマリア沖・アデン湾」においては、海賊対処任務において、常に緊張感を持って任務に当たってくれています。間もなく、CTF 151の多国籍による海賊対処任務部隊司令部に対し、自衛隊として初めて司令官を派遣することとしており、国際社会における、自衛隊に対する期待は増加する一方であります。

本年1月、私は、現地の部隊を視察してまいりました。が、それぞれ活動する隊員は、現地の人たちや同じPKO活動を実施している参加国の国々や司令官からも、大変高い評価をいただき、自衛隊の高い能力、資質がアフリカの地で遺憾なく発揮されていることを実感いたしました。正に、日本として、日本人として、世界の平和のために、立派にその任務を果たしていたのです。

今年、戦後70年の年であります。戦後70年間、日本は平和国家として歩んでまいりましたが、70年の時を経た現在、我が国を取り巻く安全保障環境は、さらに、一層厳しさを増しております。

現在、安全保障法制の見直しの検討をいたしておりますが、今までやってきたこと、この先やらなければならないことを、我が国を取り巻く世界の状況にそれに合わせて、しっかりと対応できるものにしてまいります。中国は、国防費を5年連続で10%以上増加させ、軍事力の広範かつ急速な強化を進めております。また、公船による我が国領海への断続的な侵入を行っているほか、戦闘機による自衛隊機への異常接近といった、不測の事態を招きかねない極めて危険な行為に及んでいます。国防費の増加を含めこれらの中国の軍事や安全保障に関しては、不透明な点が多く、中国が具体的な情報開示などを通じて透明性の向上を図るよう国際社会全体で働きかけを行っていくことが必要だと考えております。

また、先日も、北朝鮮による弾道ミサイルの発射が行われ、日本海上に落下をいたしました。核開発の進行や弾道ミサイル能力の増強は、我が国の安全に対する重大かつ差し迫った脅威となっていると認識をしております。また、サイバー攻撃、シリアでの邦人人質殺害事件並びにアフリカチュニジア、アルジェリアにおける邦人を巻き込んだテロや中東、欧州など世界に広がる国際テロを見るに

つけ、今や、脅威は、容易に国境を越えて、瞬時に我が国にやってくる時代となり、もはや、どの国も、一国のみでは、自国の平和と安全を守ることができなくなっているのが、現実であります。国の安全保障に思考停止は許されません。

防衛省・自衛隊は、いかなる事態においても、我が国の領土、領海、領空を守り抜く最後の砦として、不断の努力を行えるようしっかりとした対処能力を備えること、このことが極めて大事でございます。そのためには、「日米同盟」のグローバル化と強化、「防衛計画の大綱」等に基づく統合機動防衛力の整備はもとより、現在、政府・与党において検討が行われております、いかなる事態にあっても、国民の命と平和な暮らしを守り抜くため、あらゆる事態に切れ目のない対応ができる安全保障法制の整備が急務であると考えております。そして、国際協調主義に基づく「積極的平和主義」の理念に基づき、平和維持活動や国際的な人道支援、災害派遣、後方支援や海洋安全保障などアジア太平洋地域と世界の平和と安定に、これまで以上に積極的に協力していくことが重要でございます。

このような日本と世界の平和維持に向けて様々な事態に切れ目のない対応を可能にしていく時期におきまして、新進気鋭の諸君が、高い士気を持って自衛隊の第一線に加わることに心から歓迎するとともに、先輩たちが築き上げた自衛隊への高い能力と国民からの信頼、国際社会からの高い評価といった財産を余すことなく受け継ぎ、自衛隊の組織をより一層発展してくれることを期待をいたしております。

本日、この卒業式に出席をして感じましたのは、女性が堂々と、目を輝かせ、意欲的に学んでこられた、そういう意気込みでございます。近年、女性自衛官の活躍も飛躍的なものがあり、部隊の隊長、艦長、飛行隊等指揮官やP K O国際平和協力隊員等のポストにおいても、立派に女性が勤務され、活躍の場が広がっております。

昨年12月以降、自衛隊としては初めて、NATO本部に女性自衛官を派遣しておりますが、その女性自衛官は「先陣を切ってドアを開ければ後がついてくると思っているので、そういう役目は私が積極的に果たしたい。」と精力的に活躍してくれております。今後も多くの女性自衛官が指揮官・幕僚等として活躍することを楽しみにしております。

皆さん、この防衛大学校で、何を学ばれましたか。それぞれの卒業生諸君は、それぞれの心の中に、しっかりとした物事の真理を学ばれたと存じますが、「わが身で悟ったものこそ、真理なり。」人間は、体で学ばなければ、それを身に着

けなければ、本当に学んだとは言えません。卒業生におかれましては、本校での  
いろんな体験から、ここで発見した真理を磨き、自信と信念をもって、よきリー  
ダーとして、指導者として活躍されることを期待をいたします。そして、「幹部  
自衛官たんとする者は、軍事専門家である前にまずよき社会人であれ、よき紳  
士であれ」。これは、初代防衛大学校長の榎 智雄先生の幹部自衛官に対する願  
いであり、すべての防衛大学校卒業生の誓いとして、現在も受け継がれている指  
標であります。本日の卒業生も、ぜひ、「自衛官である前に、よき社会人、紳  
士であり、淑女」であり、「ビー インターナショナル、レディース アンド ジ  
ェントルメン」であることを常に心がけ、体現していただきたいと思います。

最後になりましたが、これまで卒業生を育て、暖かく見守っていただきました  
御家族の皆様、学生に対して、多大なる情熱と愛情をもって教育に取り組んでこ  
られた國分学校長をはじめとする防衛大学校の教職員の皆様、そして、本日、来  
賓としてお越しをいただいております、日頃から、防衛省・自衛隊に、多大なる  
御理解・御協力を賜っております国会議員、協力団体、神奈川県・横須賀市をは  
じめとする地元自治体、そして若者を留学させていただきましたシリロ・クリス  
トヴァン・東ティモール民主共和国国防大臣をはじめ、各国国防関係者の皆様。  
更には、我が国の防衛に大切な役割を果たしておられる各国の代表の皆様方に  
深く感謝と御礼を申し上げまして、私の訓示といたします。

平成27年3月22日  
防衛大臣 中谷 元

「学生者諸君 卒業 おめでとう 以上」